

和歌にみる和泉式部と小式部内侍

() (年) (組) (番) 名前()

丹後に下るに、宮より衣・扇賜はせたるに、
天の橋立 画かせ給ひて

秋霧の 隔つる天の 橋立を いかなる
隙(ひま)に 人渡るらむ

御返し

思ひ立つ 空こそなけれ 道もなく 霧
りわたるなる 天の橋立

大輔(たいふ)の命婦に、「留まる人よく教
へ」とて

別れゆく 心を思へ わが身をも 人の
上をも 知る人ぞ知る

小式部内侍なくなりて、孫むまごどもの侍り
けるを見てよみ侍りける

とどめおきて 誰をあはれと 思ふらむ
子はまさるらむ 子はまさりけり

内侍の亡(う)せたる頃、雪の降りて消えぬ
れば

などで君 むなしき空に 消えにけむ
沫雪(あはゆき)だにも ふればふる世に

宮より、「露置きたる唐衣参らせよ、経の表
紙にせむ」、と召したるに、結びつけたる

おくと見し 露もありけり はかなくて
消えにし人を 何にたとへむ

内侍亡くなりたる頃、人に

あひにあひて もの思ふ春は かひもな
し 花も霞も めにし立たねば

小式部内侍亡(う)せてのち、上東門院より年
ごろ賜りける衣を亡きあとにもつかはしたり
けるに、小式部と書き付けられて侍けるを見
て

もろともに 昔の下にも 朽ちもせで
埋(うづ)まれぬ名を 見るぞ悲しき

丹後守藤原保昌の妻となつて、夫の任国に下るときに、宮(彰子)さま
から衣や扇をくださつたが、天の橋立の絵を扇にお書かせになつて
秋霧がいつも深く立ち込めて行き先をさえぎる天の橋立を
どういう霧の隙間(すきま)にあなたは渡っていくのでしょうか
お返事

決心しても行く気がしません 通る道もないほど霧が立ち込め
ているという天の橋立

大輔の命婦に、「京に残る娘(小式部)をよく教育してください」と言
つて

かわいい娘と別れていくわたしの気持ちを察してください
わたしのことも 娘のことも ほんとうにわかってくださるの
はあなただけなのですから

※万寿二年(一〇二五年)十一月、小式部内侍は出産後に亡くなる。

親をこの世に残して娘は旅だったが、あの世で誰のことをいとお
しく思い返しているのだろうか。やはり、子どもであろう。私だ
って娘との死別が何よりもつらいのだから。

小式部内侍が亡くなった頃、雪が降って消えていくので
どうしてあなたははかなく亡くなってしまったのでしょうか

淡雪(あわゆき)だって降ればしばらくは消えない世なのに

宮(彰子)さまから「小式部内侍が着ていた露の模様の唐衣を奉るよう
に。経の表紙にしましょう。」とおっしゃつたので、その唐衣に結び
つけた歌

はかないもののたとえとされる露の模様もあの日のままです
その露よりもはかなく亡くなってしまった娘を何にたとえたら
いいのでしょうか

小式部内侍が亡くなった頃、人に

娘の死に出会って悲しみに沈む春は甲斐(かい)がない
花も霞も目に入らないから

※小式部内侍が亡くなった翌年の七月のこと

小式部内侍が亡くなって、女院(出家した彰子)さまよりいつも頂く着
物を、亡くなった後にも頂き、添えた文に小式部内侍の名前が書かれ
ているのを見て詠む

娘とともに昔の下で朽ちることもなく、埋もれないでいる娘の名
を見るのは悲しくてならないものです

小式部内侍の死と、和泉式部の歌

かかるほどに、このごろ聞けば、大宮おほみやにさ
ぶらひつる小式部内侍こしきぶのないしといふ人、内大臣殿の御
子など持もたるが、この年としごろ、滋野井しげのゐの頭中とうのちゆう
将じやうの子生みてうせにけり。人のいとやむむこと
なからぬ方かたこそあれ、死にざまの御事に似た
り。大宮にもいとあはれに思しめして、世のは
かなさいと思し知るるにも、いかで疾とくと思
しいそがせたまふにも、御調度てうどどもをぞいそ
がせたまふ。

小式部の母和泉式部いづみしきぶ、子どもを見て、

とどめおきて誰たれをあはれと思ふらん子はま
さりけり子はまさるらん

と詠みけり。

内大臣殿の若君みやをば、宮の僧都そうづといふ人の
坊ぼうにおはしければ、和泉、「昔恋こひしければ、
見たてまつらん。渡したまへ」と、あからさま
にありければ、僧都、「ただこの中川なかがはにおは
して、見たてまつりたまへ」とありければ、和
泉、

恋ひて泣く涙に影は見えぬるを中川までも

何か渡らん

とぞいひやりける。

※「栄花物語③」巻第二十七 ころものたま
新編日本古典文学全集 33 より

() 年 () 組 () 番 名前 ()

こうしているうちに、このごろ聞けば、大宮(彰子)に出
仕していた小式部内侍という人、これは内大臣殿(藤原教
通)の御子などを生んだ人だが、この数年来、滋野井の頭中
将(藤原公成)の情けを受け、その子を生んで亡くなったの
だった。身分がまったくさほどでもないという点はともか
くとして、お産のための死に方は、尚侍殿(ないし)のかみど
の(彰子の妹の嬉子)やこの北の方(藤原道長六男・藤原長
家の妻)の御事に似ている。大宮におかれてもほんとにいた
わしくお思いになり、世の中の定めなさをいちだんとお悟
りになるにつけても、また、ぜひ早く出家したいと思ひ急
がれて、御調度類の支度をお急ぎになる。

小式部の母和泉式部が、残された子供を見て、

とどめおきて：(あの子は、母であるわたしと自分の子
とを残して先立ってしまったが、いったい誰を一番いた
ましく思っているであろう。わが子のことを思う気持
が親を思うのよりはまさっているのだろう。わたしにも
娘との死別のつらさが何よりもまさっているのだから。)と
詠んだ。

内大臣殿の若君(小式部の子、静円)をば、宮の僧都(永円)
という人の坊にあずけていらつしやったので、和泉、「昔
の人が恋しいので、お会い申したい。お寄こしください」
と急に言つてよこしたので、僧都は、「すぐこの中川にい
らつしやつて、お会い申されよ」との返事であつたから、
和泉、

恋ひて泣く：(亡き娘を恋しく思つて泣く涙の川にその
面影はよく見えましたので、わざわざ中川まで訪れるこ
とがありましようか)
と言いおくれたのだった。

【注】

- ・小式部内侍：母、和泉式部とともに彰子に仕えていた。
万寿二年(一〇二五年)十一月、出産後に亡くなる。この
年には、彼女を含めて六人の女性が亡くなっている。
- ・中川：東京極大路沿いの京極川のこと。その二条より北
のあたりの地域をさす。
- ・彰子：藤原道長の長女で、一条天皇の中宮。万寿三年正
月十九日、三十九歳で出家する。院号は上東門院。